

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas  
May 15, 2011

慰めの神

イザヤ 40:1~2

40:1 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。

40:2 「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」

一、慰めはどこに

東日本大震災から二ヶ月以上経ちました。この地震と津波のために亡くなられた方が14,981人、行方不明の方が9,853人と発表されています。避難生活を強いられている人は115,098人で、今年中に自分の町に帰ることができるという保証はありません。この人たちが自分の町に帰れるのはいったい何時になるのでしょうか。みなさんの中には親族や友人がそんな大変な中にある方もあるかもしれません。困難に遭ったとき実際的な援助はもちろんですが、心の慰めも必要です。多くの人々が、少しでも人々の慰めになればと、さまざまな活動をしています。歌手やタレント、スポーツ選手などが被災地に行って、すこしでも人々を慰めたいと、さまざまな催しをしています。それは尊いことですが、はたして、エンターテインメントだけで、人は慰めを受けることができるのでしょうか。

アメリカは、おもちゃから自動車にいたるまで、さまざまなものを世界中から輸入しています。「そのうち "Made in USA" の製品がなくなってしまう。」などという人もいますが、おそらく「エンターテインメント」だけは、アメリカが輸出できるものとして残るでしょう。ハリウッドの映画は世界中に行き渡り、

デズニーランドやユニバーサルスタディオ、ロゴランドなどのテーマ・パークがいろんな国に作られています。エンターテインメントの多くは "Made in USA" で、アメリカが世界に大量に輸出しているものです。けれども、こうしたエンターテインメントは一時的な気晴らしにはなっても、人の心を深く慰めることはできません。それでエンターテインメントで満足できない人は、やたらと高価なものを買って漁ったり、酒やギャンブルなどに溺れるようになるのです。そしてもっと刺激の強い物を求めて、ドラッグに手を出すようになったりもします。しかし、こうしたものは、一時的には渴きをいやしてくれるように見えても、飲んでもまた乾く水のようなものです。人の心をうるおし続けることはできません。酒やドラッグ、金銭やギャンブル、また、人間関係のアディクションは、人の心にもっと渴きを与えるようになります。それは人を慰めるどころか、もっとひどい状態に引き込むのです。

では、ほんとうの慰めはどこにあるのでしょうか。どうしたら、その慰めを得ることができるのでしょうか。

## 二、慰めは神に

今朝の聖書、イザヤ書は、イスラエルはバビロン帝国に滅ぼされるけれども、神がかならず国を再興してくださるということを預言した書物です。古代の歴史で、いったん滅ぼされて、よみがえった国はほとんどありません。バビロンも、ペルシャも、またアレクサンダー大王の帝国も、ローマも亡びたままで、歴史から姿を消してしまいました。ところが、紀元前 586 年に滅んだイスラエルは、それから一世代のうち、紀元前 538 年に復興しはじめています。イスラエルの復興は、まさに神の力によってもたらされた奇跡でした。そればかりでなく、それは神の愛による奇跡でもありました。イスラエルは、神の民であるのに、自らの神を捨て、不徳な生活と不公平な政治をして、

みずから国を滅ぼしたのです。イスラエルは神の怒りを受けて滅びて当然でした。しかし、神は、イスラエルに再び救いの手をさしのべてくださったのです。イスラエルの回復は、イスラエルに対する神の愛の回復によるものでした。王を失い、国を失い、神殿さえも破壊されて、約束の土地を追われた人々に、神は愛を注ぎ、彼らを慰めてくださるというのです。

イザヤ書の後半には、この神の慰めの預言が集中しています。「天よ。喜び歌え。地よ。楽しめ。山々よ。喜びの歌声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その悩める者をあわれまれるからだ。」(イザ 49:13)「まことに主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を主の園のようにする。そこには楽しみと喜び、感謝と歌声とがある。」(イザヤ 51:3)「エルサレムの廃墟よ。共に大声をあげて喜び歌え。主がその民を慰め、エルサレムを贖われたから。」(イザヤ 52:9)神の慰めについて語っている箇所は、あげればきりがありません。けれども、この慰めの約束がたんにイスラエルのためだけであったなら、その約束がどんなに素晴らしいものであっても、私たちにはあまり意味がありません。しかし、神の慰めの約束は、イスラエルのためだけではなく、今、この時代に生きる私たちにも与えられているのです。神の慰めは、主イエス・キリストによって、私たちにも約束されているのです。

主イエスは、宣教をはじめられた時、ナザレの町の会堂でイザヤ書を手にとり、その 61 章を開いて朗読されました。そこにはこう書かれていました。「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わ

りに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。」（イザヤ 61:1-3）これは、イスラエルの回復の預言で、主イエスがこれを朗読された 500 年前に成就しているはずですが、ところが、主イエスは「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました」（ルカ 4:21）と言われました。イザヤ書は過去のイスラエルの回復だけではなく、救い主のことも預言しており、この救い主を信じるすべての人が神の慰めを受けると言っています。主イエスは、イザヤ書を朗読することによって、ご自分がその救い主であり、人々を慰める者であると言われたのです。主イエスは山上の説教で「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです」（マタイ 5:4）と宣言されましたが、それは「すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである」という預言が信じる者に成就するということを教えているのです。聖書に約束されている慰めはイエス・キリストを信じる人のためのものです。

イザヤ 66:12-13 に「あなたがたは乳を飲み、わきに抱かれ、ひざの上でかわいがられる。母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰める」ということばがあります。神の慰めは母親が赤ん坊を扱うようにやさしく、温かいものですが、同時に力ある慰めです。それは、いったん亡びた国をよみがえらせるほどのものです。罪の中に、絶望の中に死んでいる者を、そこから引き上げることのできる慰めです。神が、この慰めを与えてくださるのに、どうして私たちは、慰めにもならないものを求め、救のないところに行くのでしょうか。神の救いと慰めを知っていながら、なんの救いも慰めもないかのように嘆くのでしょうか。イザヤ 51:12 で、主は、私たちに呼びかけておられます。「わたし、このわたしが、あなたがたを慰める。あ

あなたは、何者なのか。死ななければならない人間や、草にも等しい人の子を恐れるとは。」

聖書は、慰めは神にあると教えています。人は、さまざまなところに慰めを求めます。しかし、神以外のところに本当の慰めはありません。ほんとうの慰め主のところに行きましょう。このお方を信じ、このお方から深く、大きい慰めを受け取りましょう。

### 三、慰めは神のことばによって

この神の慰めは、どのようにして与えられるのでしょうか。それは、神のことばによってです。イザヤ 40:1-2 に、こう書かれています。「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を。』とあなたがたの神は仰せられる。『エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。』」ここに、「語りかけよ。呼びかけよ」とありますが、神は、私たちに神のことばをもって語りかけ、私たちに、慰めを与えてくださるのです。みなさんは神のことばからいつも大きな慰めを受けており、たくさんのあかしを持っていることでしょう。みなさんのように神のことばによって慰めを得たひとりの人のことをお話ししたいと思います。

1977年11月15日、土曜日、新潟市で、学校のクラブ活動を終えたひとりの女子中学生が忽然と姿を消しました。警察の必死の捜査にもかかわらず、彼女の行方は全くわかりませんでした。母親は、娘に深い心の悩みがあって、それで行方をくらましたのではないかと考えました。「どうして、娘の気持ちを分かってあげられなかったのだろう」と自分を責めました。この事件があって、いろんな人が彼女を訪ね、さまざまなアドバイスを与えましたが、その多くは「因果応報」についての話でした。この家族には、過去に悪事があって、それが娘に報いと

なって表われたのだということです。だからお祓いをしてもらいなさい、先祖を供養しなさいというのですが、「因果応報」という話は、彼女をもっと苦しめました。

そんな時、近所に住んでいた宣教師が、「聖書のヨブ記を読んでみたら」と言って一冊の聖書を置いて帰りました。悶々とした日を過ごしていた彼女は、すぐには聖書を開くことができませんでした。ところが、ある日、大きな悲しみが襲ってきた時、彼女は聖書を開き、ヨブ記を読みはじめました。彼女は、それまでに聖書のことばに断片的には触れていましたが、この時はじめて自分から進んで聖書を読みました。ヨブ 1:21 の「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」ということばが彼女の心をとらえました。彼女は、ヨブ記を一気に最後まで読みました。そして、「人間よりも偉大なお方がおられ、すべてを包んでおられる」ということが分かり、聖書から深い慰めを得たのです。

その時の彼女には、聖書の予備知識はほとんどありませんでした。ヨブ記といえば、クリスチャンにとっても「難しい」書物と考えられています。しかし、彼女は、その「難しい」といわれる聖書から神を知ったのです。彼女は、「悲しくて、悲しくて、泣きながら読んだ」と話しましたが、その時の感情は混乱していました。しかし、神のことばは、そうしたことを越えて、心からの求めをもって神に近づく者に語りかけました。神のことばには力があって、痛んだ心に慰めを届けることができるのです。彼女は、神のことばによって神からの慰めを受け取り、やがて導かれてクリスチャンになりました。彼女は横田早紀江さん、娘の名前は「めぐみ」です。

私はめぐみさんが行方不明になったころ新潟県におり、北朝鮮から帰ってきた蓮池さんたちが拉致されたという、柏崎市の海岸にも行ったことがあります。地元ではそのころから「あれ

は北朝鮮のしわざだ。」を囁かれていましたが、やがてそれが本当だったことが分かるようになりました。それからさらに長い年月が経って、2002年10月に拉致された人たちのうち数人が日本に帰ってきました。しかし、めぐみさんは帰って来ませんでした。めぐみさんは拉致された時13歳、中学生でした。横田早紀江さんは、めぐみさんの誕生日の記者会見で「四十歳になるまでに助けてあげると約束したのに、約束を守れなくてごめんね。」と語っていました。それはどんなに大きな悲しみだったことでしょうか。

横田さんたちは、拉致被害者の会を立ち上げ、国家の罪というとしてつもなく大きなものと闘ってきましたが、クリスチャンの横田さんはそれだけで終わらず、毎月、北朝鮮のために祈る、祈り会を開いています。横田早紀江さんは言っています。「北朝鮮は、私から娘を奪い、私を苦しめた国ですが、北朝鮮の人たちは、私の娘以上に苦しめられています。神は全能で奇跡をなさるお方です。生きて娘に会いたい。けれどもそれもみこころの中にあります。今は、苦しめられている人たちが救われ、世界に平和が来るようにと祈っています。」自分の娘の人生を台無しにした国とその人々を憎んでも当然なのに、横田早紀江さんは、その国の人々のために祈っているのです。このようなことは人間の慰めにはできないことです。神の力強い慰めだけができることです。人間の慰めは小さく、不十分で、自分のためにも足りないほどですから、他の人に分け与えることができません。しかし、神からの慰めは人を慰め、満たすだけでなく、その人からあふれ出し、その人が他の人を慰めることができるまでになるのです。

私たちも神の慰めのことばに聞きましょう。そして、深く慰められ、この神の慰めを人々と分かちあいましょ。聖フランシスコの「平和の祈り」でメッセージを閉じたいと思います。

(祈り)

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

憎しみのあるところに愛を、  
傷のあるところに赦しを、  
誤りのあるところに真理を、  
疑いのあるところに信仰を、  
絶望のあるところに希望を、  
闇のあるところに光を、  
悲しみのあるところに喜びを  
もたらすものとしてください。

天の主よ、

慰められるよりは慰めることを、  
理解されるよりは理解することを、  
愛されるよりは愛することを、  
より求めることができますように。

なぜなら、

与えることによって受け、  
赦すことによって赦され、  
自分に死ぬことによって、  
永遠のいのちに生かされるからです。